原 著

特 集

2者の会話における表情表出の抑制・誇張が受け手の 表情表出と発話に及ぼす影響¹

野口素子 京都大学教育学研究科

吉川左紀子 京都大学こころの未来研究センター

The effects of suppression and exaggeration of facial expressions on recipients' facial expressions and utterances

Motoko Noguchi (Graduate School of Education, Kyoto University)

Sakiko Yoshikawa (Kokoro Research Center, Kyoto University)

This study measured emotion expressed in behaviors to ascertain the effects of expressive suppression and exaggeration in a dyadic conversation on interpersonal communication. Twenty-seven female participants were instructed to watch a film eliciting negative emotions, with a female collaborator on regulator of the experiment. After watching the film, they were asked to engage in a conversation about the film with the regulator, who suppressed or exaggerated her facial expressions during the conversation. The recipients of exaggerated expressions expressed positive emotion more, especially while the regulator was talking, and the proportion of their speaking time increased in the second half of the conversation, as compared to the recipients of suppressed expressions. These results suggest that suppression and exaggeration of facial expressions in communication play an influential role in recipients' expressive behaviors. Measurements of expressive behaviors could serve as important indicators to elucidate emotion regulation in communication.

Key words: emotion regulation, expressive suppression, expressive exaggeration, emotional expression, utterance

生起される感情を測る方法は様々である。例えば、心拍数、皮膚電位反応などの生理的指標やfMRIによる脳活動の測定、主観的情動経験の自己評定といった方法がある。一方、私たちは対人場面において何らかの感情が生起されるとき、生起された感情をそのまま表出することは少ない。例えば、友人の悲しい経験の話を書くときは自分が感じる悲しみ以上に悲しそうな顔をしたり、笑ってはいけないうまく面白くすることが起こったときは笑いを必死でこらえようとしたりする。

このような感情の二面性を理解するためには、参加者の内的な感情状態だけでなく、表情や音声といった外的な非言語的行動も測定することによって、感情を多角的に捉えることが求められる。本研究では、2者の会話における一方の話者による表情表出の意図的な抑制あるいは誇張がもう一方の話者に及ぼす影響について、主観的な情動経験の自己報告だけでなく表情表出と発話という行動指標を用いて検討する中で、コミュニケーション場面における表出行動に表れる感情を計測した。

情動調整 (emotion regulation) とは、どのような情動を、いつ、どのように経験し表出するのかを意識的・無意識的に調整しようとするプロセスである (Gross, 2002; Kunzmann, Kupperbusch, & Levenson, 2005)。前述の例に挙げたように、表示規則 (display

Correspondence concerning this article should be sent to: Motoko Noguchi, Graduate School of Education, Kyoto University, Kyoto University, Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan (e-mail: a0002343@gmail.com)

¹ 本研究は、平成21年度「グローバルCOEプログラム『心が活きる教育のための国際的拠点』」研究拠点形成費等補助金による若手研究者研究活動経費を使用して行われた。

rule, Ekman & Friesen, 1975) に従って内的な情動状態とは異なる表情を表出する他にも様々な方法によって情動は調整される。情動調整は、円滑な対人関係を維持するうえで不可欠であり (Demaree, Schmeichel, Robinson, & Everhart, 2004), 私たちは日常的に情動調整を行っている (Richards, 2004)。

情動調整は、情動が生起する過程の様々な段階において様々な方略で行われる (Gross, 2002)。その中に、情動が引き起こされた後に何らかの情動反応 (生理的反応, 情動表出等) を増減させる, 反応段階の情動調整がある。表情表出による情動調整とは、情動が引き起こされた後に情動反応の1つである表情表出を増減させる方略である。表情表出による情動調整は日常よく使われる方略であり (Richards, Butler, & Gross, 2003), 社会的相互作用に影響を与えられている (Lopes, Salovey, Côté, & Beers, 2005)。これらの方略が果たす機能を明らかにすることは良好な対人関係の構築に役立つと考えられる。

本研究では、表情表出による情動調整方略である表出抑制 (expressive suppression) と表出誇張 (expressive exaggeration) に着目し、会話場面における一方の話者の情動調整が受け手に及ぼす影響を、表情表出と発話割合、印象という3つの指標を用いて分析した。表出抑制とは、何らかの情動を経験したときに表情による情動表出を抑えること、表出誇張とは、何らかの情動を経験したときに表情による情動表出を大げさにすることである (Demaree et al. 2004; John & Gross, 2004)。

これまでの先行研究において、調整者によって意図的に行われる表出抑制や表出誇張が調整者自身に及ぼす情動的・認知的影響について実証的検討がなされてきた (e.g. Gross & Levenson, 1993; 野口・吉川, 2009)。実験手法は、個別実験で、映像視聴中に情動調整を行うよう予め指示をした後に情動喚起映像を呈示し、映像終了後情動経験の自己報告や記憶課題などを実施するというものであった。野口・吉川 (2009) では、表出抑制と表出誇張の両方略に関してポジティブ情動・ネガティブ情動の両面から検討したところ、調整者の主観的情動経験と記憶成績において表出抑制と表出誇張で異なる影響がみられた。表出抑制に関しては、ポジティブ情動の表出抑制において主観的なポジティブ情動経験や記憶成績が低下した一方で、表出誇張では、ネガティブ情動の表出誇張においてネガティブ情動経験の増加や記憶成績の低下をもたらすことが示された。すなわち、表出抑制ではポジティブ情動においてのみ、表出誇張ではネガティブ情動においてのみ、情動経験の変化をもたらす認知的資源を費やすことが明らかとなった。

一方、表情表出による情動調整の対人的影響について検討された実証研究は少ない。Butler, Egloff,

Wilhelm, Smith, Erickson, & Gross (2003) は、2者の会話におけるネガティブ情動の表出抑制が、受け手の精神的健康や2者関係に及ぼす影響について検討した。初対面の女性2人1組で実験が行われ、ネガティブ情動を喚起するドキュメント映像を共に視聴した後に、その内容について自由にディスカッションを行った。ディスカッションの際、2つの条件が設定された。1つは、参加者2人のうち1人が表出抑制を行い、もう1人が自然表出で会話する条件、もう1つは2人も自然表出で会話する条件であった。2つの条件を比較した結果、表出抑制が行われた条件において、表出抑制の受け手による会話に対する評価および調整者に対する親密感が低下することが示された。Butler et al. (2003) は、一方が表出抑制を行うことにより調整者の意図や気持ちがもう一方に伝わりにくくなることから、2者の会話における表出抑制は2者の関係の構築、維持・成長の妨げとなるとした。

それでは、表出抑制と表出誇張で比較した場合、対人的影響は方略によって異なるのだろうか。本研究では、情動調整の受け手への影響に着目し、(a) 受け手の表情表出、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による会話および調整者に対する印象評定、3つの指標から表情表出の抑制と誇張の効果を比較検討した。2者の会話において、表情表出は相手への伝達メッセージとしての役割があり、表出される表情の種類によってもたらされる印象も異なる。また、会話における気分の高まりは発話量に表れると言われている (綿貫・外川, 1995)。そこで、表情表出や発話割合といった指標は、コミュニケーション場面でのメッセージとなる感情表出を測る方法として適していると考えた。

受け手の表情表出に関して、表出抑制と表出誇張で違いがあるのかについてはこれまで扱われていないが、表情模倣に関する先行研究から予想を立てることができる。Dimberg (1982) は、表情写真の観察者が、写真の表情と同様の表情筋を活動させることを示している。また、市川・牧野 (2004) において、人は対面している他者の表情に無意識的に同調することが示されている。したがって、対人場面において一方が何らかの表情を表出したとき、もう一方においても同様の表情表出が観察されることが考えられる。以上より、調整者が表情表出を意図的に増大あるいは減少させた場合、受け手の表情表出においても調整者と同様の傾向がみられるだろう。調整者が表出誇張を行うことで、受け手も調整者と同じ情動価の表情を多く表出するため、表出抑制よりも表出誇張における受け手の表情表出が多くなると予想される。

さらに、本研究では、受け手の表情表出について、自身が発話する発話時と相手の話を聞く聴取時に分けて検討した。発話と表情には密接な関係がある。例えば、聞き手の表情によって話しかけやすさ (吉川・中

村, 1997) や言葉遣い (Beukeboom, 2009) が異なることが示されている。このように、聞き手の表情が発話者に与える印象や会話に影響を及ぼすことは先行研究からも示唆されている。また、相手の表情を模倣することは、インタラク션을円滑にしたり相手からの好意を増大させたりすることが示されている (Chartrand & Bargh, 1999)。さらに、人間の身体の動きやうなずきに対して同調するよう作られた画面上の仮想人物に関して、発話者である対面する人間と同じ表情をフィードバックすることがラポールの形成にとって重要であることが示されている (Wang & Gratch, 2009)。以上のことから、表情表出による情動調整が受け手の表情表出に及ぼす影響についても、受け手自身が発話する発話時と調整者が発話する聴取時では異なる可能性が考えられる。

受け手の発話についても、表出抑制と表出誇張では違いがみられるのだろうか。対面対話では、言語情報だけでなく表情や身振りといった非言語情報も合わせて用いることで円滑なコミュニケーションを実現している (高木, 2006)。また、非言語情報は言語情報に影響を及ぼすことが分かっている。例えば、吉川・中村 (1997) では、聞き手の表情の種類によって、発話表現のていねいさや発話開始までの時間、発話の流ちょうさといった発話行動に違いがみられることが示された。怒り顔は、真顔や笑顔に比べ発話開始までの時間が長く、笑顔は、怒りや真顔に比べ発話が流ちょうであった。そこで、本研究においては、表情表出による情動調整が受け手の発話に違いをもたらすのではないかと考えた。表出誇張条件において、ポジティブ表情が誇張された場合は表出抑制条件よりも受け手の発話が多くなり、ネガティブ表情が誇張された場合は受け手の発話が少なくなると予想した。

表情表出による情動調整が受け手の印象に及ぼす影響については、Butler et al. (2003) によって、表出抑制が会話に対する評価や調整者に対する親密感を低下させることが示された。一方、表出誇張についてはこれまで検討されていない。社会的相互作用における情動の自己開示や相手の反応は、親密さの形成にとって重要であると言われている (Laurenceau, Barrett, & Pietromonaco, 1998)。このことから、表出誇張により調整者の表情表出を増大させることは、受け手に対して親密な印象を与えると考えられる。したがって、表出誇張の方が表出抑制よりも、受け手による会話に対する評価が良くなり、調整者に対する親密感が高くなると予想される。

本研究では、2者の会話における表情表出による情動調整が及ぼす対人的影響について、3つの指標を用いて検討した。それにより、コミュニケーション場面における感情やそれに伴う表情表出の役割について多角的に示すことができると考えた。Butler et al.

(2003) と類似の手続きを用い、2者のうち一方が表情表出を抑制あるいは誇張させながら会話をした場合、(a) 受け手の表情表出、(b) 受け手の発話割合、(c) 受け手による会話および調整者に対する印象評定が、各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。実際の会話中の2者それぞれの表出行動を撮影し、その映像データから2者の表情表出を取り出して詳細に分析した。また、同じ映像データから発話箇所を抽出し発話割合を算出した。

方 法

実験参加者 女子大学生27名が実験に参加した (平均20.8歳, $SD=1.5$ 歳)。参加者はいずれも、表情表出による情動調整を行う実験協力者 (初対面の同一女性1名 (23歳)、以後調整者とする) と会話する受け手であった。

調整方略条件 表出抑制と表出誇張の2条件で、参加者間要因であった。表出抑制条件では、会話中に何らかの感情が生じてもできるだけ表情に出さないよう、表出誇張条件では、何らかの感情が生じたときはできるだけ表情に大きく出すよう、調整者は事前に教示された。

材料 1. ネガティブ情動喚起映像：表情が表出されやすい情動的な内容の会話になるよう、会話の前にネガティブな情動喚起映像を共に視聴した。映像は、鳥インフルエンザに関するテレビ番組 (NHKスペシャル『シリーズ最強ウイルス 調査報告 新型インフルエンザの恐怖』) から一部抜粋したものを使用した。時間は約13分であった。予備調査により、恐怖、悲しみ、嫌悪といったネガティブ情動を喚起する映像であることが事前に確認されていた²。

2. 質問紙：参加者自身の情動経験と表情表出、会話に対する評価、および調整者に対する親密感についての自己評定を質問紙によって実施した。(a) 参加者自身の情動経験と表情表出：6情動語 (怒り、驚き、悲しみ、恐怖、嫌悪、幸福) について、どの程度感じたか、表情に表れていたと思うかを、いずれも7段階

² 予備調査は、8名の女子大学院生が参加した (平均26.4歳, $SD=1.8$ 歳)。16情動語 (安心、怒り、驚き、覚醒、悲しみ、恐怖、興味、緊張、苦しみ、軽蔑、嫌悪、幸福、混乱、困惑、楽しさ、満足) について、映像視聴の間にどの程度それぞれの情動を感じたかを7段階で評価した (0: 全く感じなかった~6: 非常に強く感じた)。各情動語の平均評定値は、安心、0.25 (0.46); 怒り、2.75 (1.39); 驚き、4.13 (0.35); 覚醒、4.00 (1.85); 悲しみ、4.00 (1.31); 恐怖、4.75 (0.71); 興味、4.63 (0.52); 緊張、4.38 (1.41); 苦しみ、3.63 (1.30); 軽蔑、2.13 (1.46); 嫌悪、3.38 (1.60); 幸福、0.63 (1.06); 混乱、3.63 (1.60); 困惑、4.00 (0.76); 楽しさ、0.63 (1.06); 満足、1.13 (1.36) であった (カッコ内は SD)。一要因分散分析の結果、情動語の主効果が有意であった ($F(15, 105) = 15.46, p < .001$)。ライオン法による多重比較の結果、恐怖、興味、緊張、驚き、悲しみ、困惑、覚醒、混乱、苦しみ、嫌悪が他の情動語よりも有意に高く評定されたことが分かった。

Figure 1. Experimental setting of the conversation session.

で評価した（0：全く感じなかった／表れていなかった～6：非常に強く感じた／表れていた）。(b) 会話に対する評価：会話に関する3項目（会話の温かさ、会話の滑らかさ、相手と意気投合したと感じた程度）について、どの程度感じたかを、いずれも7段階で評価した（0：全く感じなかった～6：非常に強く感じた）。(c) 調整者に対する親密感：調整者に対する親密感を測定する5項目（「相手のことを好ましく思いましたか?」、「相手と気が合うと感じましたか?」、「相手はあなたのことを好ましく思っている、と思いますか?」、「相手とまた話してみたいと思いますか?」、「相手と仲の良い友だちになれると思いますか?」）について、どの程度感じたかを、いずれも7段階で評価した（0：全く感じなかった～6：非常に強く感じた）。

装置 1. ネガティブ情動映像を呈示するため、デスクトップパソコン1台を使用した。

2. 会話中の2者の表出行動を撮影するため、プロンプタおよびビデオカメラ、三脚をそれぞれ2台ずつ使用した（Figure 1）。プロンプタとは、ハーフミラーを使用した映像呈示装置である。各人の顔がプロンプタ後方のビデオカメラで撮影され、胸元から上が相手のプロンプタモニタに表示された。モニタの大きさは24インチで、モニタから各人までの視距離は約1mであった。

手続き 実験は、実験参加者と調整者の2人1組で行われた。2人は、1台のパソコンモニタの前に、ついたてを挟んで並んで着席した。実験者から互いを紹介され挨拶する以外、言葉を交わすことはなかった。実験者から、今回の実験は会話のプロセスについて調べることが目的であること、気分が悪くなったり途中で気が変わったりした場合はいつでも実験をやめることができることを告げられた上で、実験参加の同意書にサインした。

まず、モニタに呈示されたネガティブ情動喚起映像を共に視聴した。映像視聴後、会話の準備として、映像を見て感じたこと、新型インフルエンザの流行に対して自身に何ができると思うか、新型インフルエンザに対する世間の対応についてどう思うか、の3点について自由記述を求めた。

次に、2人はそれぞれのプロンプタの前に移動し、互いにプロンプタモニタに表示された相手の顔を見ながら、映像の内容について自由に会話を行った。プロンプタ後方のビデオカメラによって2人の表出行動が撮影された。撮影に関しては事前に了承を得た。会話中、調整者は表出抑制あるいは誇張を行った。どちらの方略をとるかは、実験者が実験前に指示した。会話の時間は最長10分と定めたが、時間内であれば2人で自由に決めて終わることができた。

会話終了後、参加者は、会話中の自身の情動経験と表情表出、会話に対する評価および調整者に対する親密感について、質問紙によって評価した。

最後に、実験の本当の目的を説明するとともに、調整者が実験協力者であることを明かし、表出行動映像の使用に関する同意書にサインをしてもらい、実験は全て終了した。調整者が実験協力者であることに実験中気付いたと申告した3名の参加者についてはデータから除外した。実験全体の所要時間は約60分であった。

ビデオ映像分析 1. 表情表出：各人の映像における会話開始から最初の3分間（前3分）と会話終了前の最後の3分間（後3分）の分析を行った³。表情表出の取り出し、および分類方法は以下の通りである。

1フレーム（0.03秒）ずつ確認し、顔面に動きがみられた箇所について、各表出の発生から消失までの時間帯を特定した。各表出を、Facial Action Coding System (Ekman & Friesen, 1978) を参考に、ポジティブ情動が表出されたとする動き（頬が上がる、口角が上がる等）がみられたものをポジティブ表出、ネガティブ情動が表出されたとする動き（眉を下げる、唇を寄せる等）がみられたものをネガティブ表出、どちらの情動価も含まない動き（上瞼をあげる等）がみられたものをニュートラル表出に分類した。まず、第一著者が全ての人物の顔面表出の出現時間帯を特定し、その全てを分類した。次に、著者と仮説を共有しないもう1名（女性、21歳）が、特定された全表出の4分の1について分類した。2名の分類の一致率は、81%であった（調整者の表情表出については、ポジティブ表出78%、ネガティブ表出96%、ニュートラル表出100%、参加者の表情表出については、ポジティブ表出77%、ネガティブ表出80%、ニュートラル表出100%）。第一著者による分類結果を表情表出の分析データとして採用した。

³ 各組約10分間の会話における全ての表情表出を分析することは負担が大きいため、会話中の表情表出の変化を捉えることができるよう、会話の冒頭部と終了部の表情表出について分析を行った。

⁴ ニュートラル表出はほとんどみられなかったため、ニュートラル表出と顔面表出がみられなかった時間を合わせて、ニュートラルとした。

Figure 2. Mean total time of each facial expression.

Upper bar: During Regulator's Speech, Lower bar: During Participant's Speech

前3分、後3分それぞれについて、ポジティブ表出（調整者単独発話／参加者単独発話）、ネガティブ表出（調整者単独発話／参加者単独発話）、ニュートラル⁴（調整者単独発話／参加者単独発話）に分類し、各出現時間の合計を算出した⁵。

2. 発話割合：綿貫・外川（1995）の発話分析を参考にした。24組のビデオ映像から、調整者および参加者がそれぞれ発話した時間帯をすべて特定した。各組の全会話時間における2者それぞれの発話時間の割合を、会話時間を半分に区切って前半、後半に分けて算出した。

結 果

調整者の表情表出

調整者の表情表出について、情動調整が適切に行われていたか操作チェックを行った（Figure 2の上段）。2（調整方略：表出抑制／表出誇張）×2（時間：前3分／後3分）×3（表情表出分類：ポジティブ表出／ネガティブ表出／ニュートラル）×2（発話：調整者単独／参加者単独）の4要因分散分析を行ったところ、調整方略×表情表出分類×発話の交互作用が有意であった（ $F(2, 44) = 51.46, p < .001$ ）。下位検定の結果、どちらが話者の場合でも調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(2, 88) = 271.01, 25.77$ 、ともに $p < .001$ ）。調

整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果、ポジティブ表出は、どちらが話者であっても、表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多くみられた（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(1, 132) = 291.18, 27.92$ 、ともに $p < .001$ ）。ニュートラルは、どちらが話者であっても、表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多くみられた（調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(1, 132) = 236.13, 22.21$ 、ともに $p < .001$ ）。

また、表情表出分類に関する単純・単純主効果が調整方略と発話のいずれの水準においても有意であった（表出抑制条件における調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(2, 88) = 177.31, 50.81$ 、ともに $p < .001$ ；表出誇張条件における調整者発話時、参加者発話時の順に、 $F(2, 88) = 270.70, 5.53$ 、ともに $p < .01$ ）。ライアン法による多重比較の結果、表出抑制条件において、どちらが話者であっても、ニュートラルが、他の表情表出分類よりも有意に多くみられた。表出誇張条件において、調整者単独発話時のポジティブ表出が他の表情表出分類よりも有意に多くみられ、参加者単独発話時のポジティブ表出およびニュートラルがネガティブ表出よりも有意に多くみられた。

以上より、調整者は、表出抑制条件では表情表出が少なく、表出誇張条件ではポジティブ表出を多く表出していることが示された。

参加者の表情表出

実験参加者の各表情表出分類の平均出現時間を、調整者のものと併せてFigure 2に示す。

2（調整方略：表出抑制／表出誇張）×2（時間：前

⁵ 調整者と参加者の両者の発話が重なる重複時間、および両者ともに発話しない沈黙時間は含まれていない。

3分／後3分)×3 (表情表出分類：ポジティブ表出／ネガティブ表出／ニュートラル)×2 (発話：調整者単独／参加者単独) の4要因分散分析を行ったところ、調整方略×表情表出分類×発話の交互作用が有意傾向であった ($F(2, 44) = 2.81, p = .07$)。

下位検定の結果、調整者単独発話時における調整方略と表情表出分類の単純交互作用が有意であった ($F(2, 88) = 8.13, p < .001$)。また、どちらの調整方略においても表情表出分類と発話の単純交互作用が有意であった (表出抑制, 表出誇張の順に, $F(2, 44) = 38.44, 17.17$, ともに $p < .001$)。調整方略に関する単純・単純主効果の検定の結果、調整者単独発話時のポジティブ表出が、表出抑制条件よりも誇張条件において有意に多くみられた ($F(1, 132) = 15.26, p < .001$)。調整者単独発話時のニュートラルが、表出誇張条件よりも抑制条件において有意に多くみられた ($F(1, 132) = 6.54, p < .05$)。

また、表情表出分類に関する単純・単純主効果が調整方略と発話のいずれの水準においても有意であった (表出抑制条件における調整者発話時、参加者発話時の順に, $F(2, 88) = 40.91, 6.71$, ともに $p < .01$; 表出誇張条件における調整者発話時、参加者発話時の順に, $F(2, 88) = 19.32, 12.14$, ともに $p < .01$)。ライアン法による多重比較の結果、表出抑制条件において、調整者単独発話時のニュートラルが他の表情表出分類よりも有意に多くみられ、参加者単独発話時のポジティブ表出およびニュートラルがネガティブ表出よりも有意に多くみられた。表出誇張条件において、どちらが話者であっても、ポジティブ表出が他の表情表出分類よりも有意に多くみられた。

以上の結果より、参加者は、特に調整者が発話しているときにおいて、表出抑制条件では表情表出が少なく、表出誇張条件ではポジティブ表出が多い傾向が示された。

発話割合

全会話時間における実験参加者の発話時間の割合

を、調整者のものと併せてFigure 3に示す。

調整者の発話割合について、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張)×2 (時間：前半／後半) の分散分析を行ったところ、調整方略の主効果および交互作用に有意な差はみられなかった ($F(1, 22) = 0.63, 1.90$, ともに $n.s.$)。すなわち、表出抑制を行った調整者と表出誇張を行った調整者では、発話割合に有意な差はみられなかった。

実験参加者の発話割合について、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張)×2 (時間：前半／後半) の同様の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F(1, 22) = 4.90, p < .05$)。会話後半において、表出抑制条件よりも誇張条件の方が発話割合が有意に多かった ($F(1, 44) = 4.93, p < .05$)。表出誇張条件において、前半よりも後半の方が発話割合が有意に多かった ($F(1, 22) = 4.39, p < .05$)。すなわち、表出誇張の受け手となる参加者の発話割合が、会話の後半において有意に多くなった。

参加者自身の情動経験と表情表出の自己評定

実験参加者の情動経験、表情表出それぞれについて、2 (調整方略：表出抑制／表出誇張)×6 (情動語) の2要因分散分析を行った。その結果、情動経験、表情表出ともに、調整方略条件による有意差はみられなかった ($F(1, 22) = 0.45, 0.37$, ともに $n.s.$)。つまり、参加者の主観的な情動経験および表情表出に関しては、表出抑制条件と誇張条件で違いはみられなかった。

印象評定

会話に対する評価および親密感に関して、それぞれ各項目の評定値を合計した合計得点を算出した。それぞれの項目の α 係数は、会話に対する評価で.84、親密感で.89であった。各合計得点について、調整方略条件で違いがないか1要因分散分析を行った。その結果、会話に対する評価に関しては、方略条件間で有意な差はみられなかった ($F(1, 22) = 2.17, n.s.$)。親

Figure 3. Mean proportion and SD of utterance time during the conversation.

Figure 4. Mean total score and SD of intimacy ratings.

密感に関しては、方略条件間で有意な差がみられ ($F(1, 22) = 6.73, p < .05$), 表出誇張条件の方が抑制条件よりも有意に高かった。つまり、表出誇張条件の方が抑制条件よりも調整者に対する親密感が高いことが示された。親密感の平均合計得点を Figure 4 に示す。

考 察

本研究は、2者による会話において一方が表出抑制あるいは表出誇張を行った場合、受け手となる参加者の表情表出や発話、印象が各調整方略でどのように異なるのかを比較検討した。

調整者の表情表出 調整者は、表出抑制条件では表情表出が少なく、誇張条件ではポジティブな表情表出が多くなることが示された。また、特に調整者自身が発話しているとき、その傾向が顕著であった。以上より、調整者は、調整方略条件に応じて意図的に表情表出を操作していたと言える。特にポジティブな表情表出が誇張されたことについては2つの可能性が考えられる。1つは、会話中に喚起されたネガティブ情動の表出を抑制してポジティブな表情を表出したという可能性、もう1つは、ネガティブ情動を経験しなかったためにポジティブな表情表出がみられたという可能性である。表出誇張条件では、調整者は、ポジティブ情動、ネガティブ情動に関わりなく自身が感じた情動をそのまま誇張するように指示されていた。したがって、調整者の表情表出にポジティブな表情が多かったのは、ネガティブ情動の表出を抑制したのではなく、相手との会話により直接ネガティブ情動を経験することが少なかったためと考えられる。先行研究においても、自分が経験したネガティブな情動エピソードについて初対面の他者に話すとき、エピソードに一致するネガティブな表情表出はほとんどみられないことが示されている (Nomura & Yoshikawa, 2011)。

参加者の表情表出 実験参加者の表情表出に関しては、特に調整者が発話しているとき、表出抑制条件ではニュートラルが多く、誇張条件ではポジティブ表出が多くなる傾向が示された。つまり、参加者は、会話の聞き手であるときに調整者の調整方略に対応した表情表出を行っており、調整者の情動調整が受け手の表情表出に影響を及ぼすことが示唆された。

表出誇張条件においてポジティブな表情表出にのみ違いがみられたことに関しては、前述したように、調整者が特にポジティブな表情表出を誇張したことによって考えられる。表出誇張条件において、調整者がポジティブな表情を表出したのに対して、参加者が無意識に同調的な表情表出を示したことにより、特にポジティブな表情表出が増大したと考えられる。

参加者の表情表出の違いは、調整者の発話の聴取時においてのみみられた。この結果については、調整者が自身の発話時により明確な情動調整を行っていたことが関係していると考えられる。そのため、参加者が調整者の話を聞くときに、特に表情表出による情動調整の影響を受けたのだろう。コミュニケーション・スキルには、自分の考えを表出するスキル、相手の発言に反応するスキル、自己や他者との関係を管理するスキルの3つがあるとされている (藤本・大坊, 2007)。発話時は自分の考えを表出するスキルが求められるため能動的な表情表出になりやすく、聴取時は相手の発言に反応する受動的な表情表出になりやすい。したがって、発話時においては調整者の表情表出による影響は受けにくい一方、聴取時においては調整者の表情表出に同調する表情表出がみられやすいと考えられる。また、表出抑制条件において、参加者が自身の発話時にポジティブな表情をより頻繁に表出していることが示された。表出抑制を行う調整者に対して、自身も表情表出を抑制して発話するのではなくポジティブな表情表出が多くみられたことは、発話時における表情表出が模倣的な表出のみではないことを示唆している。こうした補完的な表情表出の機能については今後さらに検討する必要があると考える。

発話割合 調整者の発話割合については、表出抑制を行った条件と表出誇張を行った条件で違いはみられなかった。調整者が表情表出を意図的に増減させても、調整者自身の発話量には影響しないことが示された。

実験参加者の発話割合については、会話の後半において表出抑制条件と誇張条件で異なり、調整者が表情表出を誇張させた場合、会話の後半で参加者の発話割合が増えることが示された。綿貫・外川 (1995) によれば、2者による会話が進むにつれ気分が高まり同期していくと、2者の発話量が等しくなり発話の重複が多くなるという。すなわち、調整者が表出誇張によりポジティブな表情表出を増大させた結果、会話が次第

に活発になり、後半での参加者の発話が増大したと考えられる。このことは、笑顔の相手に対して真顔よりも話しかけやすい（発話までの反応時間が短く、話しかけやすさの評価が高い）という吉川・中村（1997）の結果とも矛盾しない。

参加者自身の情動経験と表情表出の自己評定 実験参加者の情動経験および表情表出の自己評定については、いずれも表出抑制条件と誇張条件で違いはみられなかった。このことから、主観的情動経験や表情表出に対する主観的な印象は、調整者が表情表出の抑制あるいは誇張を行っても変わらないことが示された。前述したように、客観的指標として測定された表情表出については調整方略条件で異なっていることから、参加者は対面する調整者の情動調整に応じた表情を非意図的に表出していたと考えられる。

印象評定 調整者に対する親密感に関しては、表出誇張条件の方が抑制条件より親密感が強くなることが示された。Butler et al. (2003) においても、表出抑制は自然な表出のときと比べて受け手の印象を悪くすることが示されている。また、Laurenceau et al. (1998) において、情動の自己開示や相手の反応が親密さの形成にとって重要であると言われている。表出誇張条件において調整者がポジティブな表情表出を増大させたことにより、参加者の調整者に対する印象が表出抑制を行った場合よりも良くなったと考えられる。会話に対する評価に関しては、表出抑制条件と誇張条件で有意な差はみられなかった。表情表出による情動調整を行うことによって、会話内容がより情動的になることも、より客観的になることもある。話者の表情表出やそれに対する情動調整が会話にどう影響し、それが会話に対する評価とどのように結びつくかは、本論文では詳細な分析を行わなかったが、今後の検討課題の1つである。

本研究の結果、2者の会話において、一方が意図的に表情表出の抑制や誇張を行った場合、受け手の表情表出や発話割合が変わり、受け手の調整者に対する印象も変化することが分かった。受け手の表情表出に関しては、特に調整者の発話を聞いているときに、調整者の情動調整に応じた表情表出をよく示した。発話割合に関しては、調整者が表情表出を誇張させた場合、会話の後半で受け手の発話割合が増えることが示された。調整者に対する印象については、表出誇張をした場合に、表出抑制よりも親密感が強くなることが示された。Butler et al. (2003) では検討されていなかった、受け手の表情表出や発話割合といった指標においても調整方略による違いがみられたこと、表出誇張による影響が具体的に示されたことは、本研究で得られた新たな知見である。このように、表出抑制と表出誇張は、同じ表情表出による情動調整であっても異なる社会的機能を有すると言える。本研究より、コミュニ

ケーション場面において、意図的な表情表出の増減が受け手の表情表出や発話、対人印象の形成に重要な役割を果たす可能性が示唆された。

本研究では、調整者の表情表出の大半がポジティブな表情表出であり、ネガティブな表情表出はほとんど観察されなかった。表出誇張条件においてネガティブな表情表出の誇張が多く行われた場合、調整者に対する親密感や受け手の表情表出への影響が異なる可能性も考えられる。今後はネガティブな表情表出の抑制や誇張についても検討を加え、ネガティブ情動の調整がコミュニケーションに及ぼす影響を明らかにする必要がある。

本研究では、表出抑制と表出誇張という2種の情動調整の比較検討を行ったが、調整を行わない「自然な表出」との比較は行っていない。今後、自然表出条件も含めた3条件で比較することで、どの程度の強度や頻度の表情表出が円滑な会話にとって最も適しているのかを明らかにできると考えられる。

本研究は、2者の会話における表出抑制と表出誇張に関して、受け手の表情表出、発話割合、および調整者に対する印象という3つの指標について比較し、それぞれの情動調整が受け手のコミュニケーション行動に及ぼす影響を示した。参加者による情動経験と表情表出に関する自己評定については調整方略条件間で違いがみられなかったことから、主観的な感情状態と外的な表出行動とは必ずしも一致しないことが改めて示された。本研究で用いた表情表出と発話割合といった外的な表出行動の測定は、感情の側面を測る指標として、今後の感情研究においても主観的情動経験や生理的反応などの内的変化の測定との比較という点で有用であると考えられる。今後さらに、2者の会話について発話内容の分析や音声分析を行い、表情表出による情動調整が発話に及ぼす影響を詳細に検討することにより、表情表出による情動調整が円滑な会話の促進につながる仕組みを明らかにすることができるのではないかと考える。

引用文献

- Beukeboom, C. J. (2009). When words feel right: How affective expressions of listeners change a speaker's language use. *European Journal of Social Psychology*, **39**, 747-756.
- Butler, E. A., Egloff, B., Wilhelm, F. H., Smith, N. C., Erickson, E. A., & Gross, J. J. (2003). The social consequences of expressive suppression. *Emotion*, **3**, 48-67.
- Chartrand, T. L., & Bargh, J. A. (1999). The chameleon effect: The perception-behavior link and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 893-910.

- Demaree, H. A., Schmeichel, B. J., Robinson, J. L., & Everhart, D. E. (2004). Behavioural, affective, and physiological effects of negative and positive emotional exaggeration. *Cognition and Emotion*, **18**, 1079-1097.
- Dimberg, U. (1982). Facial reactions to facial expressions. *Psychophysiology*, **19**, 643-647.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the Face*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1978). *The Facial Action Coding System: A Technique for the Measurement of Facial Movement*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響 実験社会心理学研究, **47**, 51-60. (Fujimoto, M., & Daibo, I. (2007). Conversation development patterns in small group interactions. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **47**, 51-60.)
- Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, **39**, 281-292.
- Gross, J. J., & Levenson, R. W. (1993). Emotional suppression: Physiology, self-report, and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 970-986.
- 市川寛子・牧野順四郎 (2004). 刺激表情に対する観察者の同調的表情 心理学研究, **75**, 142-147. (Ichikawa, H., & Makino, J. (2004). Concordance of facial reactions to facial expressions. *The Japanese Journal of Psychology*, **75**, 142-147.)
- John, O. P., & Gross, J. J. (2004). Healthy and unhealthy emotion regulation: Personality processes, individual differences, and life span development. *Journal of Personality*, **72**, 1301-1333.
- Kunzmann, U., Kupperbusch, C. S., & Levenson, R. W. (2005). Behavioral inhibition and amplification during emotional arousal: A comparison of two age groups. *Psychology and Aging*, **20**, 144-158.
- Laurenceau, J., Barrett, L. F., & Pietromonaco, P. R. (1998). Intimacy as an interpersonal process: The importance of self-disclosure and partner disclosure, and perceived partner responsiveness in interpersonal exchanges. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1238-1251.
- Lopes, P. N., Salovey, P., Côté, S., & Beers, M. (2005). Emotion regulation abilities and the quality of social interaction. *Emotion*, **5**, 113-118.
- 野口素子・吉川左紀子 (2009). 表情表出の抑制・誇張が主観的情動経験に及ぼす影響 感情心理学研究, **17**, 12-18. (Noguchi, M., & Yoshikawa, S. (2009). The effect of suppression and exaggeration of facial expressions on the subjective experience of emotion. *The Japanese Journal of Research on Emotions*, **17**, 12-18.)
- Nomura, M., & Yoshikawa, S. (2011). Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes. *Psychologia*, **54**, 15-26.
- Richards, J. M. (2004). The cognitive consequences of concealing feelings. *Current Directions in Psychological Science*, **13**, 131-134.
- Richards, J. M., Butler, E. A., & Gross, J. J. (2003). Emotion regulation in romantic relationships: The cognitive consequences of concealing feelings. *Journal of Social and Personal Relationships*, **20**, 599-620.
- 高木幸子 (2006). コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **51**, 25-36.
- Wang, N., & Gratch, J. (2009). Rapport and facial expression. *3rd International Conference on Affective Computing and Intelligent Interaction*, 1-6.
- 綿貫啓子・外川文雄 (1995). 対話における感情の変化の解析 情報処理学会研究報告, **95**, 79-84. (Watanuki, K., & Togawa, F. (1995). Analysis of the level of interest in conversations. *Information Processing Society of Japan*, **95**, 79-84.)
- 吉川左紀子・中村 真 (1997). 顔・表情の違いによる発話行動の調整 電子情報通信学会論文誌, **J80-A**, 1324-1331. (Yoshikawa, S., & Nakamura, M. (1997). Facial information and the regulation of speech behaviors. *Institute of Electronics, Information, and Communication engineers*, **J80-A**, 1324-1331.)

(2013年8月31日受稿, 2014年3月14日受理)